

発刊に当たって



2021年夏、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大による1年の延期を経て、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されました。

千葉県では2会場を舞台として、幕張メッセで1会場では最多となる7競技が、釣ヶ崎海岸でオリンピック史上初となるサーフィン競技が実施されました。新型コロナウイルス感染症により前例のない大会であった中でも無事に終えることができましたのは、県民をはじめ、東京2020組織委員会、市町村、企業、医療関係者、ボランティアなど、多くの皆様に御尽力いただいたことによるものであり、心から感謝申し上げます。

大会は、残念ながら無観客となりましたが、世界最高峰の舞台での本県ゆかりの選手をはじめとするアスリートの活躍は、新型コロナウイルス感染症の影響が続く厳しい状況の中で、多くの方々に力を与えてくれました。また、パラリンピックの開会式・閉会式や、障害を乗り越えて自身の限界に挑戦するパラアスリートの姿などから、多様性や共生社会といった大会のテーマを言葉にせずとも共有できたことは大きな財産と考えています。加えて、パラリンピック閉会式では、共生社会の実現に向けて優れた取組を行った学校に贈られる2つの賞を、いずれも県内の学校が受賞するという大変喜ばしい出来事もありました。

大会の開催決定以来、県内では、企業や団体、行政などが一体となり、大会後も見据えながら、ホストタウン制度や事前キャンプ受入れによる国際交流の推進、観光客の受入環境の整備、ハード・ソフト両面からのバリアフリーの推進、パラスポーツの振興、ボランティア活動への参加促進等の多様な取組が展開されてきました。

さらに、オリンピック史上初のサーフィン競技開催地となったことを生かした地域づくりや、パラリンピックを契機とした障害のある方の様々な分野での社会参加の促進など、新たな動きも生まれてきており、これらを大きく育てていくことも重要です。

こうした取組を大会時の一過性のものとすることなく、スポーツと文化を通じた地域活性化、共生社会の実現を進め、本県の持続的な発展につなげていきたいと考えています。

結びに、この記録誌が、県内で8競技が実施された東京2020大会の感動の記憶や、大会を契機に各主体が共に積み重ねてきた財産を後世に伝える貴重な記録・資料として、さまざまな場面で幅広く活用されますよう祈念しまして、発刊の御挨拶といたします。

千葉県知事

熊谷俊人

発刊に寄せて



東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の熱い戦いも閉幕を迎え、ここに千葉県開催記録誌が発刊されますことは、誠に意義深く心からお喜び申し上げます。

本県では、県内2会場で、オリンピック・パラリンピックを合わせて、開催都市である東京都に次ぐ競技数となる計8競技が実施され、幕張メッセでは、フェンシング、テコンドー、レスリングのオリンピック3競技と、ゴールボール、シッティングバレーボール、テコンドー、車いすフェンシングのパラリンピック4競技が行われました。また、釣ヶ崎海岸では、オリンピック史上初となるサーフィンが行われ、連日熱戦が繰り広げられました。

今大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により1年の延期、そして無観客での開催を余儀なくされ、さらには徹底した感染防止対策が求められたほか、予定されていた事前キャンプの受入れや選手との交流の一部が中止となるなど、かつてないほど難しい大会となりました。

それでも大会本番を迎えると、世界各国から集まったトップアスリートたちが素晴らしいパフォーマンスを存分に発揮され、両大会を通じて日本の選手、特に本県ゆかりの選手の皆さんが数多くのメダルを獲得されるなど、大変見事な活躍をされ、県民に大きな勇気と希望、感動を与えてくれました。

この大会の開催決定を契機として、本県において、多くの方々が力を合わせて、スポーツ振興や国際交流、バリアフリーなどを進めてきたことは、千葉県の未来に活かされるものと信じております。

県議会といたしましても、これまで県民の皆様が一体となって進めてきた取組が次世代にしっかりと引き継がれ、本県の持続的な発展につながるよう、力を尽くしてまいります。

結びに、大会の開催に当たり御尽力いただきました、東京2020組織委員会の皆様、ボランティアの皆様、医療従事者の皆様、その他すべての関係者の皆様に感謝の意を表するとともに、本県スポーツの益々の発展と、皆様方の御健勝を祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

千葉県議会議長

信岡光博

発刊に寄せて



東京2020大会は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、史上初めて開催が延期され、また世界中の人々の暮らしが大きく変化した1年を経て開催された、過去に類を見ない特別な大会となりました。

多くの困難と厳しい状況の中、ほとんどの会場で無観客での開催となりましたが、これまでの大会と変わらないアスリートの躍動によって、競技をご覧になった全ての方に感動や希望が届けられたと思います。

特に千葉県においては多くの大会競技が開催されました。釣ヶ崎海岸サーフィンビーチではオリンピック史上初の競技となるサーフィン競技が実施されました。幕張メッセでは1つの施設としては最多となるオリンピック・パラリンピック合わせて7競技が実施され、そのうちパラリンピック4競技は、開催都市に次いで多い競技数となりました。また、会場周辺や沿道を地域の子どもたちの育てたひまわりで彩る活動や、海岸周辺の継続的な清掃活動、またシティキャストによる空港でのオンラインによるお見送りなど、各国選手や大会関係者を「おもてなし」の気持ちで迎える取組も行っていただきました。

そして、東京2020大会をコロナ禍の下での最初の世界的なイベントとして、安全・安心の下で開催するために、千葉県の関係者の皆様には、県内自治体・保健所・医療機関等との連携などコロナ対策に特にご配慮いただきました。その成果として、大会を成功に導くことができ、コロナと闘いつつ、社会の営みを継続するための1つのモデルを示すことができたと考えます。

千葉県では、大会の開催決定を契機として、パラスポーツの普及や障害への理解促進等にも積極的に取り組んでおり、大会後もこうした取組を継続して、共生社会の実現を進めていくと聞いております。組織委員会としても、東京大会のレガシーをしっかりと構築し、より良い社会への変革へとつなげていけるように、最後まで取り組んでまいります。

関係者の皆様のスポーツ界への引き続きのご支援をお願いいたしますとともに、東京大会に携わった全ての方々に、改めて感謝申し上げます。

公益財団法人
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
会長

橋本聖子

発刊に寄せて



はじめに、IOC、IPC、東京都、組織委員会、千葉県をはじめ多くの関係者の皆様のご尽力により、千葉市の幕張メッセにおいて、オリンピック・パラリンピック7競技が無事開催されましたこと、また聖火リレーの点火セレモニーにより、多くの方の思いのこもった火がつながりましたこと、心から敬意と感謝を申し上げます。

今大会は、新型コロナウイルス感染症が収束していない厳しい状況下において、無観客による史上例を見ない異例の開催となりましたが、世界中から参加したアスリートをはじめ、本市ゆかりのアスリートや、市内開催競技での日本代表選手の大活躍は、千葉市民にとって特に強く印象に残り、多くの感動を与えてくれたものと確信しています。

さて、競技会場都市である本市は、東京2020大会を成功に導くとともに、準備から開催までに都市としてどこまで成長できるかが最大の意義であるという認識のもと、海浜幕張駅南口におけるエレベーター・エスカレーターの設定や、会場周辺の歩道の段差解消などのバリアフリー整備を行ったほか、ボランティア活動を支援するネットワークの設定、県・経済界等と連携した機運醸成イベントの実施など、オール千葉の一員として様々な取組を進めてまいりました。

特に、パラリンピック開催を共生社会実現の最大の機会と捉え、幕張メッセ会場を満員にしようと、市内で開催されるパラスポーツ大会に併せた産学官連携による集客イベントや、障害の有無に関わらず交流できるスポーツイベントなどを行い、機運を盛り上げるとともに、パラスポーツへの理解・関心を高め、障害のある人のスポーツ参加を促進するほか、オリ・パラ教育では、パラスポーツを授業の一環に位置づけるなど、パラスポーツの推進に重点的に取り組んでまいりました。

これまでの取組の成果に加え、パラリンピックでのアスリートの活躍などにより、「パラスポーツは障害者だけが行うスポーツではない」と、人々の認識が変化していると感じることが多くなりました。今後も障害のある人もない人もともに交流できるまちづくりを推進し、価値のあるレガシーとして後世に引き継いでまいります。

結びに、本記録誌が千葉県における東京2020大会の足跡を示す記録となり、多様性を尊重した共生社会の実現など更なる都市の発展に寄与する貴重な資料として広く活用されることを祈念し、発刊に寄せる挨拶といたします。

千葉市長 神谷 俊一

発刊に寄せて



令和3年夏、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、アスリートの皆様の素晴らしい活躍が我々の胸に深い感動を残しました。

7月25日から27日、一宮町の釣ヶ崎海岸ではオリンピック史上初のサーフィン競技が行われました。当町が会場に選ばれたことを大変嬉しく存じております。

大会期間中、遠くに台風が通って大波が立ち、世界トップレベルの選手達が豪快な技を繰り出すのに相応しい舞台となりました。日本選手も五十嵐カノアさんは銀メダル、都筑有夢路さんは銅メダルを獲得。当町出身の大原洋人さんは5位タイ、前田マヒナさんは9位タイと、素晴らしい戦績を残しました。動画放映が世界的に評判となり、大変嬉しい展開にもなりました。

一方、大会はコロナ禍において、1年延期、無観客での開催となりました。最も切望していた地元小中学生を対象とした観戦プログラム、地域のPR・交流の場として準備をしていたおもてなしの歓迎イベントは中止となりました。観戦を心待ちにしていた国内外の方々、都市ボランティアなどの形でオリンピックへの関与をご希望されていた方々をはじめ、オリンピックを肌で感じる機会を楽しみにしていた地域住民の方々にとって残念なことであります。

しかしながら、当町には今後に向けて大きな収穫もございます。

ハード面では、大会開催時の活用を念頭に、JR上総一ノ宮駅に東口を開設いたしました。これは千葉県の援助を得て、はじめて可能になりました。また、会場跡地には千葉県と協力の上で約1haの自然公園を開設いたします。更に、会場付近で避難所機能を備えた収益的な施設の設営をめざすことも町内外から大きな推進力を頂きました。

ソフト面では、当町の知名度が決定的に上がりました。現在、当町の海岸部を中心に投資・建設ラッシュが起きており、先ごろの基準地価上昇率は2年連続で県下1位です。

今後はこうした遺産を適切に運用し、暮らしの質の長期的増進に、如何につなげていくかが行政の課題だと捉えております。

今回の大会は千葉県、一宮町にとって大きな飛躍のジャンプ台となる歴史的イベントでありました。大会組織委員会や千葉県ほか、お力を発揮頂いた皆様に、一貫してご協力頂いた県民の皆様、そして一宮町民の皆様に心から御礼を申し上げます。

結びに、本記録誌が貴重な資料として広く活用され、様々な分野の発展に寄与することを祈念し、発刊に寄せる挨拶といたします。

一宮町長

馬淵昌也

発刊に寄せて



東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、千葉県内でも8競技が行われ、テレビなどの報道を通じてでしたが、世界中から集まった選手の素晴らしい活躍は、県民に大きな感動をもたらしました。

2014年から大会開催に向け、その効果を千葉県の一層の発展につなげ、次世代にしっかりと引き継ぐため、経済、スポーツ、文化、行政など各分野の代表者をメンバーとする「2020年東京オリンピック・パラリンピックCHIBA推進会議」が設置されました。大会の開催は千葉県の国際的な魅力や知名度を高め、将来を担う人づくりや、経済の活性化、国際交流を推進する千載一遇のチャンスであるとの認識の下、企業・団体・大学・行政等が方向性を共有し、相互に連携しながら、大会後も見据えた取組を主体的に進めてまいりました。

また、県内経済6団体により結成された「みんなで応援！千葉県経済団体協議会」でも、県内企業が一体となって、「スポーツを応援するチーバくん」のロゴマークを活用したポスターの掲出や応援のぼりの設置を行うなど、機運醸成の活動を展開してきました。さらに、「パラリンピックのフルスタジアム実現」を目標に、県などと連携した体験会を開催するなど、パラスポーツの振興にも取り組みました。

大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による、史上初となる大会の延期、そして無観客での開催など、予想だにしなかった事態となりましたが、関係各位のご努力により無事に開催され、成功裡に閉幕を迎えることができました。大会に携わられた全ての皆様のご尽力に改めて感謝申し上げます。関係者が一丸となって、工夫を重ねながら大会に向けて取り組んできたことは、歴史に残る偉業であり、その取組自体も官民連携のレガシーとして残っていくと信じております。

結びに、オリンピック・パラリンピック開催で培った官民連携の精神を大切にして、千葉県の今後ますますの発展に力を注ぐことをお誓い申し上げ、発刊に当たってのご挨拶といたします。

2020年東京オリンピック・パラリンピックCHIBA推進会議
議長

佐久間 英利